

学生のポピュラー音楽の 受容に関する調査研究

中 西 裕

1. はじめに —「ポピュラー音楽の歴史」開講に向けて—

平成26年度より、就実大学では一般教養教育科目として「ポピュラー音楽の歴史」が開講され、筆者が担当する予定となっている。当該科目は、学生にとって日常的に接している関心事であるポピュラー音楽を歴史の中に位置付け、メディアの変遷や社会状況などとの関係で捉えることを通して、日常を学問的に見る楽しさに気づかせ、学問へのポジティブな態度を育てることを目的としている。これに先立って、本学の学生にポピュラー音楽の受容に関するアンケート調査を行い、その実態の把握を試みた。

昨今は情報メディアが発達が著しく、音楽を楽しむ方法が多様化している。また、情報のカスタマイズ化が進み、音楽の好みも多様化している。そのような時代にあって、若者はどのように音楽を聴き、またどのように音楽コンテンツを消費しているのだろうか。

若者の音楽嗜好・受容に関する調査研究は、小泉（1998）^(注1)、川西・奥（2004）^(注2)、太田（2009）^(注3)など必ずしも少なくはないが、時代やメディアの変化にともなってその傾向は年々変化を続けており、常に新しい調査が必要となる。本稿では、本学の学生とその保護者へのアンケート調査を通して、若者の音楽受容行動に関して新旧を比較し、最新の状況の分析を試みたい。

2. 調査方法

アンケートは、平成25年度後期に筆者の担当する科目の受講生（人文科学部・教育学部1～3年生）など約100名に対して行い、95名から回答を得た。男女内訳は女性70名、男性25名である。

同時に、学生にアンケート用紙を自宅に持ち帰ってもらい、保護者からも回答を得た。保護者からのアンケートの回収は自宅生でないと不可能であり、また自宅生でも両親から回答を得られないケースや、用紙の回収・提出を学生が失念するケースも多く、回収率はなかなか上がらなかった。そこで科目等履修生など学生の親世代の男女数名からも追加で回答を得、総数33名となった。保護者等の男女内訳は女性27名、男性5名、無記入1名で、ほとんどが40代・50代であった。学生と保護者等とを比較することで、現代の若者の音楽受容の特性を明らかにしようとするものである。

保護者等の回答者には「保護者等の方は、全ての質問に対して、現在のことではなく、あなたが20歳前後のころを思い出して、その当時のことを答えてください」との注意書きを付した。これによって、現在20歳の世代（以下「子世代」）と20～30年前に20歳前後であった世代（以下「親世代」）との比較をする意図である。

3. 集計結果と考察

以下に今回の調査の内容と集計結果を記し、考察を行う。アンケートはA3用紙1枚裏表を用い、手書きで回答する形で行った。

3-1 音楽とのかかわり方

相馬（1985）^(注4)による音楽行動因子の分析を元にして、さらにメディアの変化による表現の改訂や新項目の追加を行い、次の12項目を作成した。

問1 次の各項目があなたにあてはまるかどうか、それぞれ「はい」「いいえ」を○で囲んでください。

- ・音楽系のクラブやサークルに入っている（入っていた）
- ・楽器を何か演奏することができる
- ・DTM（コンピュータを使った音楽制作、ボーカロイド含む）をしている
- ・楽器を習っている（習っていたことがある）
- ・自分で作詞や作曲をしている（していたことがある）
- ・ヒットチャートに興味がある
- ・ミュージックビデオ（PV）をよく見る
- ・音楽を聴くとき音質をかなり気にする
- ・カラオケによく行く
- ・音楽を聴くことは自分の楽しみ（趣味）としての順位が高い
- ・音楽を聞く時間は一日平均1時間以上だ
- ・音楽コンテンツ（CDなど）を購入する金額は月平均2000円以上だ

それぞれの項目に「はい」と答えた割合を学生と保護者等で比較したのが次の表である。t検定を行い、5%水準での有意差が認められる項目に「○」を表示してある。

	学生	保護者等	t検定p値	5%有意差
音楽系サークルへの参加経験	34.7%	15.2%	0.017003	○
楽器演奏可能	55.8%	48.5%	0.477465	×
DTM	3.2%	0.0%		×
楽器を習う経験	55.8%	45.5%	0.314631	×

自分で作詞や作曲	20.0%	12.1%	0.270616	×
ヒットチャートへの興味	43.2%	75.8%	0.000693	○
PVの視聴	68.4%	33.3%	0.000588	○
音質へのこだわり	61.1%	42.4%	0.070034	×
カラオケによく行く	55.8%	12.1%	0.000000	○
音楽鑑賞の優先順位高い	86.3%	81.8%	0.560975	×
音楽鑑賞時間が平均1時間以上	60.0%	48.5%	0.262847	×
音楽購入金額が月平均2000円以上	14.7%	24.2%	0.272807	×

保護者等の回答数が少ないため有意差が出にくい状況だが、次のようなことが読み取れる。現在の学生は小中高校で吹奏楽を中心にした音楽サークルの活動が盛んな時代に育った。親世代は「ヒットチャート」への関心が高く、子世代は低い。逆に子世代はPV（プロモーションビデオ、ミュージックビデオ）の視聴が一般化している。カラオケが日常化していることも子世代の大きな特徴である。カラオケの項目でp値が0となっているが、これは表示桁数未満の極めて小さい値であり、カラオケの利用に関しては親世代と子世代で非常に明確な差異が発生していることを示している。

また、昨今のデジタル技術で安価な再生装置でもおしなべて音質が良く、筆者は、子世代ではすでに音質へのこだわりをわざわざ考えるようなことはなくなったのではないかと考えていたが、集計の結果からは親世代との有意差は認められなかった。

次に子世代について男女の差を見てみよう。

	女子学生	男子学生	t検定p値	5%有意差
音楽系サークルへの参加経験	37.1%	28.0%	0.404130	×
楽器演奏可能	61.4%	40.0%	0.071600	×
DTM	4.3%	0.0%	0.083232	×
楽器を習う経験	67.1%	24.0%	0.000143	○
自分で作詞や作曲	22.9%	12.0%	0.198536	×
ヒットチャートへの興味	48.6%	28.0%	0.066941	×
PVの視聴	74.3%	52.0%	0.059660	×
音質へのこだわり	60.0%	64.0%	0.728233	×
カラオケによく行く	62.9%	36.0%	0.023150	○
音楽鑑賞の優先順位高い	91.4%	72.0%	0.055599	×
音楽鑑賞時間が平均1時間以上	61.4%	56.0%	0.645247	×
音楽購入金額が月平均2000円以上	12.9%	20.0%	0.450936	×

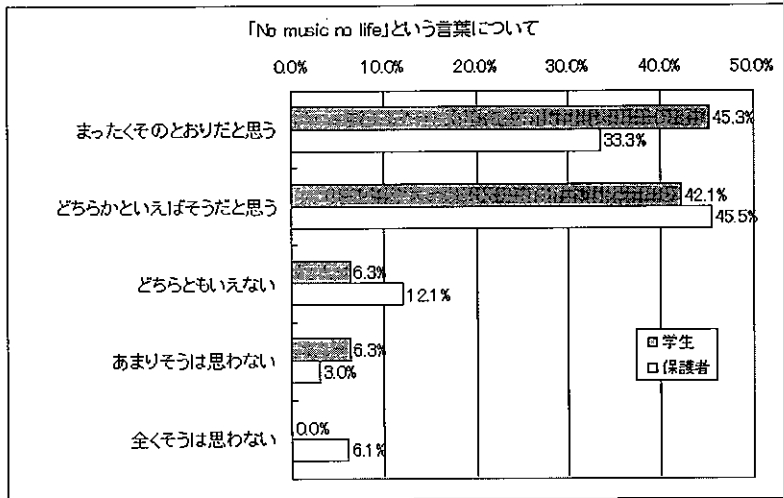
ここでは「楽器を習った経験」と「カラオケによく行く」について有意差が出た。それぞれ女子が高いという結果である。前者は、ピアノなどのクラシック系のお稽古ごとが女子において盛んであることの結果と言えるだろう。

3-2 音楽の価値の評価

「No music no life.」(音楽のない人生なんて考えられない)という言葉について、その通りと感じるかどうかを5段階で尋ねてみた。これは、学生からの事前の聞き取りなどから、PV時代の子世代が音楽をファッションやダンスなども含めた総合芸術の一要素と捉えていて、独立した

要素としての「音楽そのもの」の価値を意識する親世代とは違う傾向が出るのではないかと考えたからである。

〔図1〕



しかし、結果は上のグラフのようにほとんど差異は認められなかった。

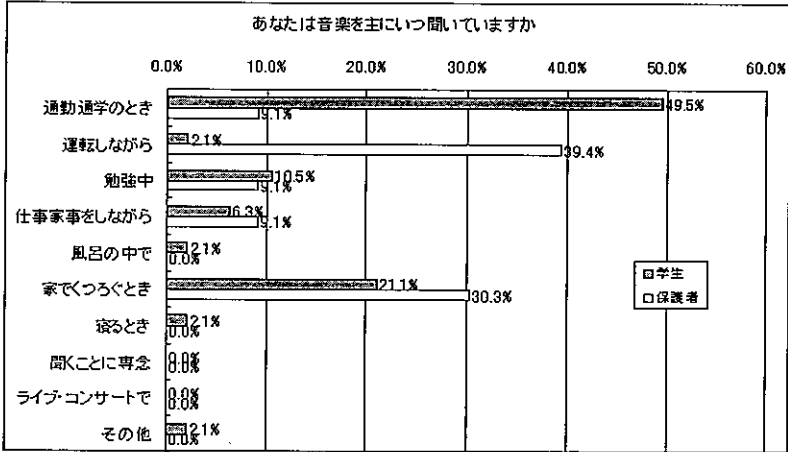
3-3 音楽を「いつ」「どのようにして」聞くか

次に、音楽を聞く主たる時間帯（シチュエーション）と、音楽を聞くために使うメディア（再生装置）について尋ねてみた。

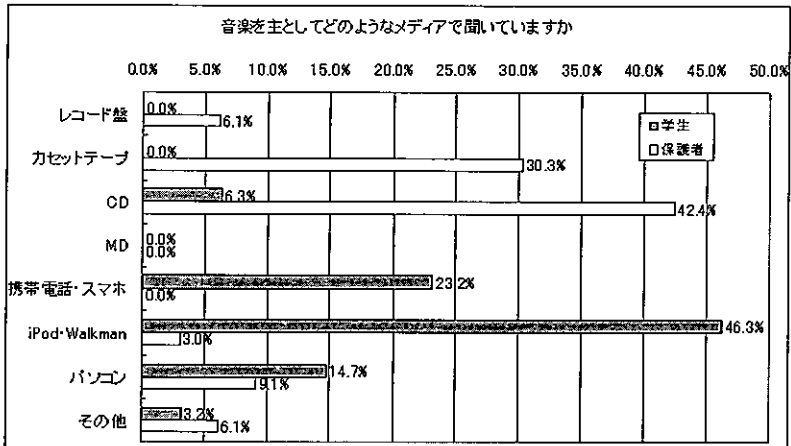
これらの質問では親世代と子世代に明確な差異が現れた。子世代は通学時に最も音楽を聞いているが、親世代は車と自宅で聞いている。親世代は自宅のオーディオ装置やラジカセ、そしてカーオーディオなど可搬性の低い再生装置で音楽を聞いていたことがわかる。これに対して子世代はWalkmanやiPod、携帯電話、スマートフォンなどのような可搬性の高いメディアを使って、通学などの移動中に音楽を聞いていることがわかる。かつて学生にとっては通学の列車内が重要な読書時間であった

が、現在多くの学生にとって通学列車の中は音楽を聞く時間ということなのかもしれない。

(図2)



(図3)

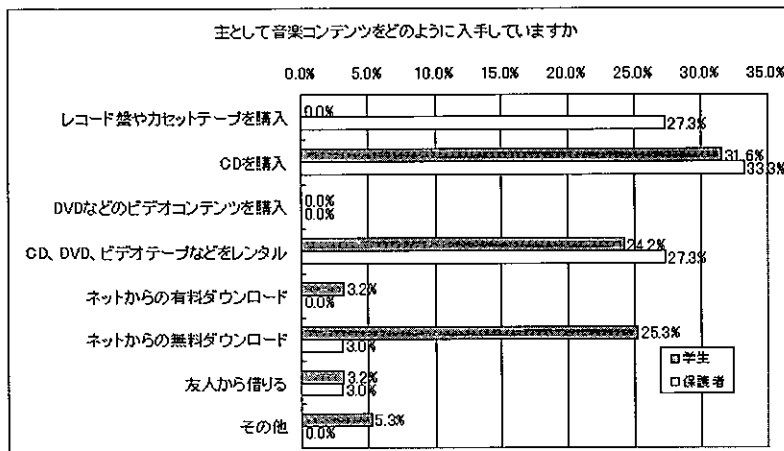


また携帯電話やスマートフォンには防水仕様のものも多く、少数ながら風呂を主たる音楽聴取時間としている学生も現れている。音楽の聞き方も機器の発達に呼応して多様化しつつあると言えるだろう。

3-4 音楽コンテンツをどのように入手するか

商品としての音楽コンテンツはどのように流通しているだろうか。親世代と子世代の音楽コンテンツ入手の方法はどのように変化しているだろうか。

〔図4〕



親世代の若い頃はレコード盤やCDを購入したり、レンタルしたりしていたことがわかる。子世代もCDは購入しているが、親世代のレコード盤やカセットテープといったメディアは姿を消し、その代わりに台頭したのがネットからの無料ダウンロードによる入手であることがわかる。また子世代の「その他」には、そもそも音楽を「入手しない」(Youtube等でストリーミングでの視聴のみ)というケースも含まれており、脱パッケージ化の変化は「そもそもコンテンツを所有しない」という受容のス

タイトルも可能にしていると言えるだろう。

著作権法の改正により、違法コンテンツのダウンロードが違法化され、さらには刑事罰化まで行われたにもかかわらず、音楽コンテンツの売り上げが伸びていないことは、日本のコンテンツ産業とポピュラー音楽文化の発展の観点からは危機感を持つべきだろう。

筆者は現在の学生が音楽コンテンツの入手にほとんどお金を使っていないと見ていたが、この結果だけを見ると、子世代もCDで盛んに音楽を購入しているように見える。しかし、前掲の3-1の回答を見れば「音楽購入金額が月平均2000円以上」なのは子世代で15%に満たない。CD(アルバム)を1枚買えば2000円を超えるのであり、子世代はCDを月平均1枚も買わないということがわかる。とすると子世代の60%が「音楽鑑賞時間が1日平均1時間以上」と答えている事実を説明しにくい。子世代の回答は「購入するならばCD」という意味での選択と解するべきかもしれない。1日平均1時間以上の聴取を毎日続けるとしたら、それだけの音楽ソースをどのようにして入手しているのだろうか。レンタルとともに、違法コンテンツを含む無料ダウンロードに負うところが少なくないものと考えざるをえない。

なお子世代においては、CDの購入が行われていてもCDによる聴取はほとんど行われていないことは、前掲3-3の結果によって明らかである。子世代はCDを購入したら、パソコンなどを通して携帯電話・スマホ・ポータブルオーディオプレーヤー等の携帯機器に楽曲を転送して聴取しているのである。

3-5 好きなジャンルとカラオケで歌うジャンル

次に、親世代・子世代が「好きな」「よく聞く」ジャンルと、カラオケに行ったときに「よく歌う」ジャンルを尋ねてみた。質問の仕方としては「あなたが最もよく聞く、あるいは好きな音楽ジャンル」と「二番目によく聞く、あるいは好きな音楽ジャンル」を、「音楽ジャンル表」

の中からひとつずつ選んでもらう形で調査した。カラオケについても同様に、最もよく歌うジャンルと、二番目に歌うジャンルである。

音楽ジャンル表として、次のようなものを作成した。これはNHK放送世論調査所編『現代人と音楽』^(注5)の音楽ジャンル表を参考にして、ポピュラー音楽をより細分化し、さらに「ボカロソング」「アイドル歌謡」「ヴィジュアル系」など現在の若者のジャンル意識に新たに登場したものを付け加えるなどしたものである。追加のジャンルについては、本アンケートの実施前に、自由記述方式で学生から予備アンケートを取り、これらが学生にとって一種のジャンルを表すものとして認知されていることを確認した。これらは厳密な意味で音楽ジャンルとはいえないものであるが、ここでは「回答者がどのように認知しているか」を優先している。同じ楽曲が複数のジャンルに分類できることも多々あるのだが、あくまで回答者がどう認知しているかを調査したものと理解していただきたい。なお、回答の便を考えいくつかのジャンルには親世代、子世代それぞれに向けた例示を施してある。

〔音楽ジャンル表〕

1	音楽のジャンルについてはよくわからない
2	特に好きなジャンルはない
3	(昭和時代を中心としたいわゆる) 歌謡曲
4	(いわゆる) 演歌
5	日本のロック・ミュージック (忌野清志郎、サザン・オールスターズ、など、ただしヴィジュアル系を含まず)
6	ヴィジュアル系バンド (X-Japan、ゴールデンボンバー、など)
7	海外のロック・ミュージック (ビートルズ、レッド・ツェッペリン、など)
8	日本のフォーク・ミュージック (イルカ、ゆず、など)
9	フュージョン、クロスオーバー (クラシカル・クロスオーバーを含まず)

10	アイドル歌謡（キャンディーズ、AKB48、嵐、など）
11	ボカロ・ソング（ボーカロイド使用の楽曲）
12	アニメ主題歌、挿入歌
13	CMソング
14	映画音楽、ドラマ主題歌、挿入歌
15	ゲーム音楽
16	ディスコミュージック、ダンスミュージック、ヒップホップ、ラップ
17	ニューミュージック（松任谷由美、中島みゆき、など）
18	テクノポップ（イエローマジック・オーケストラ、Perfumeなど）
19	（ここまでのいずれにも入らない、いわゆる）J-POP（小室哲也、EXILE、など）
20	K-POPなどのアジア系の歌謡曲
21	シャンソン、カンツォーネなどヨーロッパ系の歌謡曲
22	カントリー・ミュージック（ジョン・デンバー、など）
23	ジャズ
24	ソウルミュージック
25	レゲエ
26	ラテン音楽（タンゴ・ルンバなど）
27	イージーリスニング（ポールモーリア、など）
28	（ここまでのいずれにも入らない）欧米のポップミュージック（Wham!、マイケル・ジャクソン、など）
29	童謡、唱歌
30	合唱曲
31	吹奏楽曲
32	ミュージカル曲（劇団四季や宝塚の劇中曲など）

33	ヒーリングミュージック (エンヤ、など)
34	ギャグソング (クレイジーキャッツ、嘉門達夫、など)
35	クラシック (交響曲、バロック、ピアノ曲、などクラシック全て)
36	クラシカル・クロスオーバー (イル・ディーボ、女子十二楽坊、富田勲、など)
37	日本歌曲 (「荒城の月」など)
38	オペラ、クラシックの声楽曲
39	(日本の) 民謡
40	(海外の) 民俗音楽・ワールドミュージック
41	(日本の) 古典音楽 (雅楽、義太夫、長唄、常磐津、小唄など)

まずは親世代・子世代に好まれるジャンルを知る意味で、一番目、二番目を区別せずに集計したのが次の表である。なお「好きなジャンル」は回答者数を分母にして割合を計算しているが、「歌うジャンル」については「カラオケに行かない人は空欄にしてください」という指示に従って一番目、二番目の両方を空欄にした人数(子世代20、親世代8)を分母から減じて計算している。またそれぞれ15%以上の数値には網掛けを施してある。

		好きなジャンル		歌うジャンル	
		学生	保護者	学生	保護者
1	ジャンルわからず	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
2	好きなジャンルなし	5.3%	6.1%	2.7%	0.0%
3	歌謡曲	1.1%	12.1%	4.0%	44.0%
4	演歌	0.0%	0.0%	0.0%	12.0%
5	日本のロック	23.2%	9.1%	24.0%	8.0%
6	ヴィジュアル系	6.3%	3.0%	4.0%	4.0%
7	海外のロック	11.6%	24.2%	2.7%	0.0%

8	日本のフォーク	8.4%	18.2%	10.7%	28.0%
9	フュージョン等	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
10	アイドル歌謡	9.5%	12.1%	13.3%	20.0%
11	ボカロ・ソング	25.3%	0.0%	32.0%	0.0%
12	アニメ主題歌	40.0%	6.1%	50.7%	8.0%
13	CMソング	4.2%	0.0%	1.3%	4.0%
14	映画音楽、ドラマ主題歌	7.4%	12.1%	9.3%	0.0%
15	ゲーム音楽	9.5%	0.0%	2.7%	0.0%
16	ダンス系音楽	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
17	ニューミュージック	1.1%	39.4%	1.3%	48.0%
18	テクノポップ	2.1%	0.0%	0.0%	0.0%
19	J-POP	24.2%	18.2%	30.7%	20.0%
20	アジア歌謡	5.3%	0.0%	4.0%	0.0%
21	ヨーロッパ歌謡	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
22	カントリー	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%
23	ジャズ	1.1%	0.0%	1.3%	0.0%
24	ソウル	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
25	レゲエ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
26	ラテン音楽	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
27	イージーリスニング	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
28	その他欧米ポップス	3.2%	18.2%	1.3%	4.0%
29	童謡、唱歌	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%
30	合唱曲	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
31	吹奏楽曲	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
32	ミュージカル曲	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

33	ヒーリング音楽	0.0%	6.1%	0.0%	0.0%
34	ギャグソング	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
35	クラシック	4.2%	12.1%	0.0%	0.0%
36	クラシカル・クロスオーバー	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
37	日本歌曲	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
38	オペラ等	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
39	日本民謡	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
40	ワールドミュージック	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
41	日本古典音楽	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

「好きなジャンル」を見ると、親世代がすでに歌謡曲・演歌といった世代でないことがわかる。海外のロックやポップスに親しみ、フォークやニューミュージックで育った世代である。これに比べて子世代は洋楽やクラシックを聞かなくなり、その代わりに和製ロック、ボカロソング、アニメソングといった分野が台頭している。子世代は（親世代とサンプル数が違うので確実ではないが）海外のロック、ゲーム音楽、アイドル歌謡、アジア歌謡にも一定の支持があり、音楽の好みも多様化しているという傾向もありそうである。

次に、好きなジャンルとカラオケなどで歌うジャンルを比較してみよう。親世代では歌謡曲、ニューミュージック、フォークミュージック、アイドル歌謡などが主に歌われていることがわかる。特に歌謡曲とアイドル歌謡については「好きなジャンル」としての支持がさほど高くないにもかかわらず「歌うジャンル」には高率で選ばれている。「盛り上がる楽曲」「コミュニケーション性の高い楽曲」として支持されているようである。同様に子世代を見ると、ボカロソング、アニメソング、J-POPが同様の位置付けにあることがわかる。

小泉(2007)^(注6)は、若者がポピュラー音楽を「パーソナル・ミュージック」「コモン・ミュージック」「スタンダード・ミュージック」の三層構

造で捉えていることを指摘した。「好きな、よく聞くジャンル」は「パーソナル」、「歌うジャンル」は「コモン」もしくは「スタンダード」に当たるという見方もできそうである。

女子学生と男子学生を比較したのが次の表である。なお、ここでは紙幅の関係で男子、女子ともに選択者0名であったジャンルは表示していない。上の表と同様、「歌うジャンル」については一番目、二番目の両方を空欄にした人数（女子13、男子7）を分母から減じて計算している。またそれぞれ15%以上の数値には網掛けを施してある。

		好きなジャンル		歌うジャンル	
		女子	男子	女子	男子
1	ジャンルわからず	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%
2	好きなジャンルなし	4.3%	8.0%	0.0%	11.1%
3	歌謡曲	0.0%	4.0%	3.5%	5.6%
5	日本のロック	17.1%	40.0%	15.8%	50.0%
6	ヴィジュアル系	4.3%	12.0%	3.5%	5.6%
7	海外のロック	5.7%	28.0%	0.0%	11.1%
8	日本のフォーク	8.6%	8.0%	10.5%	11.1%
10	アイドル歌謡	10.0%	8.0%	14.0%	11.1%
11	ボカロ・ソング	30.0%	12.0%	38.6%	11.1%
12	アニメ主題歌	44.3%	28.0%	52.6%	44.4%
13	CMソング	4.3%	4.0%	1.8%	0.0%
14	映画音楽、ドラマ主題歌	5.7%	12.0%	8.8%	11.1%
15	ゲーム音楽	11.4%	4.0%	3.5%	0.0%
17	ニューミュージック	1.4%	0.0%	1.8%	0.0%
18	テクノポップ	1.4%	4.0%	0.0%	0.0%
19	J-POP	27.1%	16.0%	35.1%	16.7%

20	アジア歌謡	7.1%	0.0%	5.3%	0.0%
23	ジャズ	1.4%	0.0%	1.8%	0.0%
31	吹奏楽曲	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%
35	クラシック	4.3%	4.0%	0.0%	0.0%
36	クラシカル・クロスオーバー	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%

「好きなジャンル」としては、アニメソングやボカロソングを濃厚に支持しているのが女子であることがわかる。男子はボカロソングへの支持が少ない代わりにロックが支持されている。「歌うジャンル」としては男子の分母が極めて少ないので統計的に意味づけることは困難だが、アニメソングのコミュニケーション性は男女ともに意識されているということを読み取れそうである。

4. まとめ —親世代から子世代へ—

以上をまとめると、親世代、子世代の典型的なポピュラー音楽の受容行動は次のように集約できるだろう。

【親世代】 レコードからCDへの転換を経験し、洋楽に親しみ、フォーク、ニューミュージック、J-POPを好み、ヒットチャートなど音楽の流行に敏感。音楽は、主として自宅のオーディオ装置やカーオーディオでスピーカーを鳴らして聞く。たまに行くカラオケでは好きなフォーク、ニューミュージックだけでなく歌謡曲やアイドルソングも歌って場を盛り上げる。

【子世代】 音楽系の部活やサークルに所属する者も多く、CDからネット音楽への脱パッケージ化の転換を経験しつつある。音楽をネット動画として楽しむことも多い。アニメソング、ボカロソング、J-POP、和製ロックを好む者が多いが好みは多様化。携帯電話、スマートフォンやポータブルオーディオプレーヤーを使ってイヤホンで音楽を聞きながら通学する。カラオ

ケがコミュニケーションの場として定着しており、アニメソング、ボカロソング、J-POPで盛り上がる。

この20～30年間にメディアはアナログからデジタルに変化し、その結果、高音質の再生装置が超小型化を遂げ、ポータブルメディアとなった。その結果、スピーカーから流れていた音楽は一人ひとりのイヤホンの中で奏でられるようになり、電車の中で、あるいは街を歩きながら音楽を聴取することが一般化した。それと呼応してヒットチャートへの興味も薄れて音楽の好みもパーソナライズされてきた。その中で人気を得ているのがアニメソングであり、またアマチュアの作品が主体であるボカロソングも市民権を得、音楽の制作も個人化してきた。いっぽうネット上では「コンテンツは無料（であるべき）」という風潮も起こり、音楽コンテンツ産業は苦しい時代に突入している。

今回の調査を通して、このような時代状況を推定することができる。ただし、今回の調査ではサンプル数が必ずしも十分ではなかった。その点を反省し、今後さらに精密な調査と分析を行いたい。

《注・参考文献》

- 注（1）小泉（1998）：小泉恭子. 高校生と音楽メディアーポピュラー音楽の調査をとおして. 日本教育社会学会大会発表要旨集録（50）, p95-96, 1998.
- 注（2）川西・奥（2004）川西孝依・奥忍. 「現代の若者と音楽」に関する調査. 岡山大学教育実践総合センター紀要（4）, p43-53, 2004.
- 注（3）太田（2009）：太田正清. 学生の音楽嗜好・楽曲受容の調査と楽曲鑑賞に関する研究（1）. 中国学園紀要（8）, p137-147, 2009.
- 注（4）相馬（1985）：相馬久子. 高校生と音楽情報・モノグラフ・高校生 '85 Vol.15 高校生と情報行動, p18-31, 福武書店, 1985.
- 注（5）NHK放送世論調査所編. 現代人と音楽, p68, 日本放送出版協

会, 1982.

注(6) 小泉(2007): 小泉恭子. 音楽をまとう若者. 勁草書房, 2007.